

K・ハムスン

# 神 牧

—— グラーン中尉の物語 ——



中村都史子訳

● 公 論 社

# 牧 神

—— グラーン中尉の物語 ——

ハムスン, K 原作

中村都史子訳



公 論 社

## 訳者略歴

中村都史子 (なかむら としこ)

昭和16年 京都市に生る  
38年 国際基督教大学人文科学科卒業  
46年 東京大学大学院比較文学比較文化修士課程修了  
現 在 東京都立京橋高等学校教諭

牧 神 —— グラウン中尉の物語 ——

1097—109809—2449

---

昭和53年9月18日発行

著 者 中村都史子

発行者 里見 匡

発行所 東京都渋谷区道玄坂1丁目15番3-205号 株式会社 公論社

郵便番号 150 電話 東京 (03) 476-3157 (代表) 振替 東京 8-196170

---

©1978, Koron Sha

印刷 壮光舎印刷株式会社 製本 誠製本株式会社

# 目 次

グライン中尉の手記

1

グラインの死  
——一八六一年の手記——

143

解  
説

167

グリーン中尉の手記

## 1

この頃私はよくノールラン地方の夏のあの永遠の日のことを思い浮べる。独り夏の日のこと、住んでいた小屋とその背後に広がっていた森のことを考えている。これを書いているのは気を紛らわすためまた時間を潰すためなのだ。時間はありすぎる位だし気になる事もなく全く気楽な生活を送っているのだが時は思うように早くは過ぎ去ってくれない。私はあらゆる点で満ち足りているし三十歳という年齢は決して年がいったという齢ではない。数日前二枚の羽根が遠くから送付されてきた。送ってくる必要のない人からのもので王冠のついた便箋に包んで封印がしてあった。二枚の毒々しい緑色の羽根を見ているのも気を粉らす種にはなる。その他には何の悩みもなく時折昔の古い銃の傷跡のため左足が少し痛むだけである。

思い出せば二年前時のたつのは本当に早かった、今とは比べものにならない位早くそれと気付く前に一夏が過ぎ去っていった。

二年前の一八五五年の事だった。気持を紛らわすために書くのだがあの事が起ったのは或いは夢を

みていたのかもしれない。あれからその事を考えたことも殆んどないし今ではこの体験にまつわる多くの事も忘れてしまっている。しかし夜がとても明るかったのを覚えていて、多く事が全く奇妙な様相を呈していた。一年は十二か月だが夜は昼となり空には星が一つも見られなかった。出合った人達は一風変わっていて前に知り合ったどんな人とも種類の違う人間であった。時には子供が一晩の内に輝くばかりに成熟した大人へ変身してしまふこともあった。それは決して魔術などではない、けれども私は前にこんなことを体験したことがなかった、決して。

湖畔にある大きな白壁の館で出合った人に暫くの間心を奪われた。絶えず彼女のことを思い出す訳ではない、それどころか今ではもう殆んど忘れてしまっている、がその他のことは全て、鷗の叫び声も、森の中の狩りも、夜も、暑い夏の日もよく頭の中に浮んでくる。彼女を知ったのは全くの偶然であった。この偶然がなかったら彼女は一日たりとも私の考えの中に入ってきはしなかったであろう。

私の小屋からは入り組んだ島や岩礁、入江、海、青味を帯びた山の尾根が見え小屋の後には森、底知れないような森があった。木の葉や木の根の匂い、木の髓の匂いを思い出させる松の木の豊潤な香りを嗅ぐと喜びと感謝の気持で満されるのだった。私は毎日イソップを従えて山の牧場へ行き考えることといえば雪が残っていて牧場の半分は柔かな雪解けの土となっているけれども一日そこで過ごすことだけだった。仲間はいソップだけだった。今はコーラがいるがあの時の相手はいソップでこの犬は後に射殺するはめになったのである。

狩りの後小屋に帰ってきた夜などは和やかな気持で全身が包まれ心の中が快く揺さぶられる、イソ



ップの側へ行き「我々は実にうまくやっているなあ」等と話しかけるのだ。「さあ火をおこして暖炉で鳥を焼こうか。どうだい」と犬に言う。

一緒に食べ終わるとイソップは暖炉の後の自分の居場所に戻る一方、私はパイプに火をつけベンチに腰を下ろし、暫くの間森の静かな囁きに耳を傾けるのだった。空には風が小屋に運んでくる微かなざわめきがある。山の牧場の向う側で雷鳥の鳴く声のはっきり聞こえてくる他には静まりかえっているのだった。

私は外出用の身仕度のまま横になって眠りこんでしまい海鳥が鳴き始めるまで目をさませないことが何度かあった。窓の外を見ると大きな白壁の商店、シリルンの船着場、パンを買いに行ったことのある雑貨店等が僅かにみえる。暫く横になったままこのノールラン地方の森の外れにある小屋に自分がいるのをふしぎに思うこともあった。

イソップは暖炉の側でその細長い身体を振わせ首輪を鳴らし、あくびをし尾を振った。

こうして三、四時間眠った後は何もかも気持よかった。こんな風にして多くの夜が過ぎていった。

雨のことあれば嵐のこともあるがそれはどうでもよいことだ。雨の日にも小さな楽しみがあり幸

せな気持で過すことができる。そんな時我々は自分の居場所にじっとしていて先の事だけを考える。時々声をたてずに笑い辺りを見廻す。人は何を考えてるのだろう、きれいに磨かれた窓ガラス、ガラスを通る日の光、小さな丘、そして青空の裂目。これ以上は何もいらぬ。

時には珍らしい出来事も、沈みこみ投げやりな気持から我々を救いだすことはできない。我々は舞踏会のさ中にあつてもぼんやりと放心状態のまま佇んでいることがある。というのも喜びや悲しみの源は我々の心の中にあるからだ。

私はあの日のことを覚えている。海岸に出かけたところ雨に出合い戸の開け放しになっていたボート小屋に入って暫く座っていた。ただ何となく時間潰しのため小声で歌を口ずさんだ。一緒にいたイソップが突然耳をピンとたてた。私も歌を押し殺し耳をすませる。外で声が聞え人が近付いてくる。偶然、全くありふれた偶然。二人の男と娘が一人首から上だけ覗かせて私のいるほうにやってきた。彼等は笑いながら互いに声をかけ合う。

「急いで。ここで暫く雨宿りができるよ」

私は立上った。男の一人は糊のついていない白いシャツを着ておりそれは雨でずぶぬれになっていたが、濡れたシャツにはダイヤモンドの止金が止めてあつた。彼は、先端の長く尖ったしゃれた靴をはいていた。私はその男に挨拶をしたが彼はパンをかう店で顔なじみの商人のマック氏だった。マック氏は私は未だ応じていないけれども彼の家に招待してくれていたのだ。

「おや、あなたですか」彼は私を見ると言った。「私達は水車小屋に行くつもりだったので戻らな

きやならなかったんです。何てお天気でしょうね。中尉さん、いつシリルンにいらっしやいますか」彼は一緒にいた背の低い黒い髭のある男を紹介した。教会の別館に住んでいる医者だった。

娘はベールを鼻のところ迄押上げてイソップに静かに話しかけていた。彼女の上着が目に入ったが裏地とボタンホールからそれが染直したものだとかわかった。マック氏が紹介してくれる、彼の娘でエドヴァルダといった。

エドヴァルダはベール越しに私をちらりと見ると犬と話を続け首輪の字を読んだ。

「おやそう、お前はイソップというの、先生、イソップって誰でしたっけ。私の覚えてるのはたった一人、寓話を書いた人ですわ。フリギア人ではなかったかしら。はっきりしないけど」子供、女学生。私は彼女を見る。背は高かったがまだ大人ではなく一五、六歳位だろう、手袋をはめない長い日焼した手をしていた。たぶん今日の午後、百科事典でイソップの項にゆきあたってたのかも知れない。マック氏は私に狩のことを尋ねた。「何を一番よく撃たれますか。いつでも好きな時に私のポートを使ってください。ちょっと声だけかけて下さればいいんです」医者は一言も言わなかった。三人が立ち去った時私は医者が少しびっこをひき杖をつけているのに気がついた。

来た時と同じ様に何も考えず歌を口ずさみながら帰路につく。ポート小屋でのこの出会いは私の心に共感も反感も呼び起さなかった。一番よく覚えているのはダイヤモンドの止金がこれも濡れて光らないまま止めてあったマック氏の濡れたシャツだった。

小屋の外に大きな灰色の石があった。この石は私に好意を抱いていて私が出かけたり戻ってくるのを見つめているような気持ちにさせられる。朝出かける時よくこの石の側を通る。石は帰宅を待ちうけてくれる友人の様でもあった。

それから森の中で狩を始める。何か仕留めることもあったしそうでない時もある。

島の外には海が憂うつそうな静けさをたたえ横たわっていた。高い山に登ると私はよく海を見下した。穏やかな日には船は殆んど現われず三日間ずっと鷗の様な小さな白い帆一つしか目にしないこともあった。風が起ると遠くの山は殆んど見えなくなり天候が変り南西の風が吹く。私が観客となる劇が始まるのだった。全ては煙ってしまふ。天と地とが混じり合い海は荒れ狂う大氣の踊りに沸き返り、人間や馬やゆらめく旗が拡がってゆく。私は断崖の下に身をよせ様々の事に思い馳せる、心が緊張してくるのだった。いったい自分は何の証人になるというのだろう。なぜ海は私の目前にかくも己れを開放してくれるのだろうか。たぶん私はこの時大地の心髄とその有様、そしてあらゆるものが沸き返える姿を見ていたのだ。イソップはじっとして、時々鼻を上向け匂いを嗅いでいた。悪天候のため元気がなく神経質そうに脚が震えていた。言葉をかけてやらなかったので私の両脚の間に入りこみ私の真似をして海を見つめていた。人間の声は何処にも聞えなかった。頭の周りの陰うつなざわめき以外何

も聞えてこなかった。遠くの方に岩礁が見える、それだけだった。海はまるで狂人のようにこの岩礁に襲いかかるのだ。いや悪天候に全身ずぶ濡れとなって立上がり鼻から息を吹き出し髪と髭を輪の様

に結んでいる海神のようであった。彼は全世界を見下ろしやがて泡だつ海の中へ沈んで行った。  
嵐の中を小さな真黒な汽船が海から入ってきた……

午後になって棧橋へ下りてみると小さな黒い汽船が港に停泊していた。郵便船だ。多勢の人が遠来の客を迎えるための棧橋に集っていたがどの人も風貌は違っても例外なく青い目をしている。頭に白いウールのスカーフを被った若い娘が二、三步先に佇んでいた。漆黒の髪が白いスカーフとくつきりした境目を見せている。彼女はもの珍らし気に私の方を見、皮の服と銃を見る。私が話しかけると驚いて顔を背けてしまった。「あなたはいつも白いスカーフを被られたらどうですか。とてもよくお似合いですよ。」と私は声をかけた。その時アイスランド風のセーターを着たがっちりした体格の男が近づいてきて彼女のことをエーヴァと呼ぶ。明らかに娘なのだ。

このがっちりした体格の男には見覚えがある、彼は、数日前銃に新しい導火線を取付けてくれたから……

雨と風が強まり雪は全部溶けてしまった。数日の内に冷え冷えとした冷たい空気は地上から姿を消してしまふ。腐った枝がきしみ鳥が群をなして鳴いていた。その時はもう間近かだ、太陽は近づきつつある。ある朝太陽が森の後に昇った、すると私の頭の天辺から爪先まで甘美なものが走る。私は静かな喜びをかみしめながら肩に銃をのせた。

この頃は獲物の不足をかこつという事はなかった。私は氣の向くままに撃ちまくった、野兎、雷鳥、黒雷鳥、それに偶々海岸にいて何か海鳥が獲れそうな時はそれも撃った。よい季節だった、日が長くなり空気は澄んできた。二日分の装備を整えて山頂へ登ったところラップ人に出合い彼等から草の味にする小さな脂肪分の多い小さなチーズをもらったこともある。何回か山に出かけたが帰りにはいつも撃ち落した鳥が二、三羽袋に入っていた。私は腰を下ろしイソップをつなぐ。目の下一マイルの所は海だった。山の中腹は極く微かに歌を眩やきながら流れ落ちる水のため濡れて黒ずんでいた。遠くの間々の秘めやかな音楽を耳に腰を下ろして辺りを見回しているといつも時は短かいのだった。この微かな果てしのない水の音は無人の山の中のこととて、耳を傾ける人もそのことを考えてくれる人もいない。しかしその音は孤独の中ただひたすらに囁き続けている。この囁きを聞いた時はもう山を淋しい場所だとは思わなかった。時には変わった事もある。雷が大地を震わせると岩が動き出し砂ほこりの跡を残しながら海の方へ転がっていく、と同時にイソップは鼻先を風の方に向け今まで嗅いだことない焦げるような匂いにふしぎそうな表情をする。雪解けの水が山の割目押し進んでゆく時は一発の銃声又は何げなく発した一声だけでも岩を揺るがせ転がしてゆくのに十分であった。

一時間たつ、もっとだったかもしれない、時のたつのは本当に早かった。イソップを放し肩に荷物

を背負うと小屋に帰った。日が傾き始めた森の外れでいつもの道にぶつかると、この道のうねりは見事であるでリボンの様だ。そのうねりを一つ一つ辿るのは楽しい。急ぐ必要はない、小屋で私を待っている者は誰もいない。王侯貴族の様に気ままに歩き、文字通り好きなように静かな森の中を歩いてゆく。声をたてる鳥もなく遠くで黒雷鳥だけが鳴いていた。この鳥は四六時中鳴いているのだ。

森から出てくると、前方に二つ人影が歩いているのが見えた。追いついてみると、エドヴァルダで医者が後から歩いてきた。銃を見せるはめになったが二人はコンパスや荷物まで覗いた。小屋に招待すると二人は訪問を約束した。

夜になった。小屋に帰り火をつけると鳥を焼いて食事をすませた。明日はまた新しい日が始まるのだ……

辺りは静かで何の物音もしない。私は夕闇の中に横たわり窓の外を見る。この時森や野原には魔法にかけられた様な光が漂っている。日は沈み油の様にじっと動かぬ豊かな赤い光が地平線を染め、空はどこまでも冴えわたっている。澄みわたった海を見つめるとまるで世界の根底と顔をつき合せていて、私の心はこのむき出しの底の部分を見つめこっそりと胸をとぎめかせしかも安んじているようだった。地上で祝祭でもあるのだろうか、地平線は今晚薄紫と金色の衣裳をまとっている、それは星の音楽と潮流にのって進む船の登場する大がかりな祝祭なのだ。そして私は目を閉じた。この船の後を追いつつ次から次へと心の中で船旅を続けていった……

こうして日一日と日が過ぎていった。

私は散歩の途中で雪が水に変り氷が解けるのを見た。小屋に十分食料のある間は数日間一度も銃を撃たずに過した。気ままに日を送り時の過ぎるに任せた。どこに出かけても目を惹きつけられ耳をそばだてるようなことが沢山あった。全てが毎日少しずつ変っていた。柳の枝も葉も春を待っていた。例えば水車場に行ってみると未だ氷に閉ざされている。しかし周りの地面は年月をかけて踏み固められ、人々が穀物の袋を背負ってやってきては挽いてもらうのを見てきた。私もそういう人のようにここに来たのだ。壁にはまだ多くの字や日付が刻まれていた。

さあ！

5

もっと書くべきなのだろうか。いやちがう。ちょっと気持を紛らわすためだし二年前の春の訪れと野原の様子を書いていると時が早くすぎるのだ。大地と海から匂いがたち昇り始めた。森の中で腐った草の硫黄の様な匂いがし、かささがが嘴で小枝を運んでは巣を作っていた。数日の内に小川には水が溢れ泡だち流れ始めた。蝶が一、二羽舞い魚が回遊から戻ってきた。商人の小船が二艘、魚を満載して魚干場の外にとまった。岩の上で魚を乾すことになっているこの辺りで一番大きな島には突如として生々とした動きが始まる。小屋の窓から全部様子がわかるのだった。



しかしここには音は全然響いてこなかった。私はずっと一人だった、時折人が通りすぎる、鍛冶屋の娘エーヴァも見かけた、彼女の鼻の周りには少しそばかすがあった。

「どこに行くの」

「森に」と彼女は静かに答える。彼女は薪を運ぶための綱を持ち白いスカーフを被っていた。後姿を見送ったが彼女は振り返らなかった。

こうしてまた誰にも会わないまま多くの日が過ぎていった。

春は間近に迫り森は輝いていた。木のとっぺんで太陽を見つめながら鳴いているつぐみを見るのは大きな楽しみだった。時には日の出の時の鳥や獣の喜びに溢れた声をきくための明方の二時にはもう起き出したこともあった。

春は私にも訪れたのだ。血が足を踏みならす様に騒ぐ時があった。小屋の中で座って釣針や竿の手入れのことを考えるけれども指一本動かせないのだ。溢れる喜びと同時に暗い不安が心の中から湧き上がる。イソップが突然起き上がり足をふんばって短く吠えた。誰かが小屋に来たのだ。慌ててナイトキヤップを脱ぐ間もなくドアの所で先ずエドヴァルダの声がした。律気にしかしさりげなく彼女と医師は約束通り来てくれたのだ。

「ええ、彼はいるわよ」と彼女の声が聞えた。小屋に入ってくると娘らしい仕種で手を差し出した。「昨日も来たんですけど、あいにくあなたはおられませんでしたの」とはっきり言った。

彼女は私のベッドカバーの上に腰を下ろすと小屋の中を見回した。医者は長いベンチの私の傍に座